Hilliard State School　訪問

白百合学園小学校　教頭　清水　雅子

１　はじめに

私立学校教員海外研修団は、2024 年 9 月 5 日、視察先である Hilliard State School を訪問した。1991 年に創立されたクイーンズランド州立小学校で、現在は Prep（幼稚園年長）より Year6（6 年生）まで、570 名の児童が在籍している。ブリスベン地域の公立小学校では 2 校のみとなる Apple 社認定校で、児童全員参加の BYOD、個人の iPad を所持して学習を進めている。2019 年に同校を訪問した同僚より、iPad を使用した授業や先進的なテクノロジーの授業について話を聞いていたので、5 年経過した今、さらに授業が深化しているであろうことを期待して視察に臨んだ。

２　児童の様子

広々とした敷地は緑でおおわれ、あちこちに背の低い校舎が並んでいる。出迎えてくださったのは校長先生の Leanne 先生、副校長先生の Tracy 先生、Kirsty 先生で、6 年生の児童 2 名がアボリジニの儀式とスピーチで私たちを歓迎してくださった。児童は皆ポロシャツを着用しているが、6 年生だけはデザインが異なる。5 年時に皆で相談を重ねてデザインを決めるとのことで、背中には児童一人ひとりの名前が書いてあった。自分たちで作り上げたものを着る児童の姿は、誇らしげに見えた。

３　授業の様子

最初に見学したのは 5 年生の日本語の授業である。この学校では 3～6 年生で日本語を学んでいるとのことで、児童は私たちと目が合うと、親しげに、あるいは恥ずかしそうに日本語の挨拶をしてくれた。

「上」「下」など、配置に関する漢字を学ぶために、各自 iPad のアプリを使い、個別に学習を進めていた。

書き順を学んだり、クイズをしたり

児童の回答状況の把握には Seesaw というアプリが使われ、これは家庭学習でも活用しているとのこと。先生は作業の途中で必要に応じて自作の動画を流し、個別に進める児童の学びを後押ししていた。教室内にはティーチャーズエイドという支援員がいて、児童の学習状況を見守っていた。

5 年生の担任の先生が行う算数の授業では、iPad でグラフ作成を行っていた。

ただし、机上にはノートも置いてあり、「書いて学ぶことも重要」であると考えて6割はペーパー、4割はiPadを使っているとのことである。iPadの学習ツールとしてのよさを最大限に生かす一方で、小学生の成長段階においては書く作業をやはり重視すべきであることは、日本もオーストラリアも変わらないのだと思った。

6年生の算数の授業では、同じ教室の中にペアワークでどちらが早く回答できるかを競う児童や、個別で確率の学習をしている児童がいた。これらの課題もSeesawで回収され、先生が☆マークで評価し、コメントも残す。クイーンズランド州では、1年間が4ターム（4学期）に分かれているので、各タームの最初の週にテスト等を行って児童の学力を把握し、その上で各自の進度を決める。校長先生は、「その児童がそのタームで少しでも向上できるようにすることが教育の目的だ」とおっしゃっていた。クラス全体と無理に合わせることはしないで、その児童の学びを支えていく。iPadを活用して個別最適化の授業を進めている様子がよく分かった。

期せずして教育実習生の授業を見学することもできた。こちらも6年生で、単位の換算を行っているようであったが、これまでの授業とは異なり、一斉授業的な側面が強かった。全体指導を行った後、個別に作業をする児童を見守り、声をかけていく様子は日本でもよく見る光景であり、教師側の意図を明確にしやすい方法なのだと感じる。教師は一斉授業からスタートし、一人ひとりをみとり、個別指導ができるように実践を積み重ねながら生涯成長を続けていくものなのかもしれない。

４　テクノロジーの授業

図書室の奥がテクノロジーの部屋となっていて、動画撮影用のグリーンバックもあり、本格的である。入り口のところにはこの日の授業の概要が示してあった。Apple 認定校であるため、専門家が来て授業を行っているとのことで、5年生がNumbersを使い、テーマパークの施設を建設する総費用を計算するという壮大な課題に取り組む。作成したスプレッドシートに使用されている数式、書式について画面録画で説明し、その映像をSeesawにアップロードする。児童はやり方を理解した後は、各自思い思いの場所で作業に取り組んでいた。

このテクノロジーの部屋では、他の教室とは異なり、ほぼ100%iPadでの作業となるため、机はなく、座りやすいようにクッション等が準備してある。教室の壁にはSTEM(Science,Technology,Engineering,Maths)に関わる様々な言葉の説明が視覚的に示されていた。難しい言葉も多いが、日常的に使うことによって児童にとっての共通の言葉となり、意思疎通のために使いこなすことができるようになるのだろう。

コーディングとは？アルゴリズムとは？

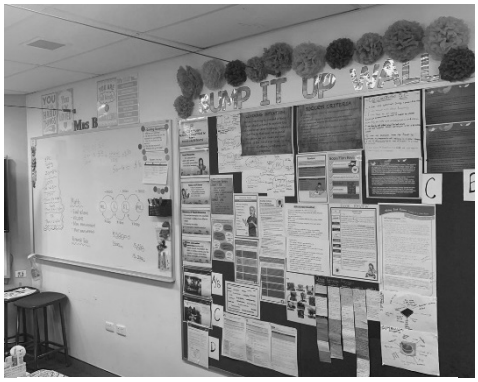
５　Bump it Up Walls

事前にこの学校の HP を見たときに、「学習の追跡・向上のための Bump it Up Walls」という記述があり、どのようなものか気になっていた。各教室の壁という壁がカラフルな掲示物で埋め尽くされていたが、この学校では教室掲示を「3 番目の先生」と位置づけている。いただいた資料には、その目的として「学習単位の記録と学習を積み重ねる場所であり、児童が学習コンテンツにアクセスできるように促すきっかけや足場として機能する」と書いてある。また、児童が次の５つの問いに答えるのを手伝うとのことである。

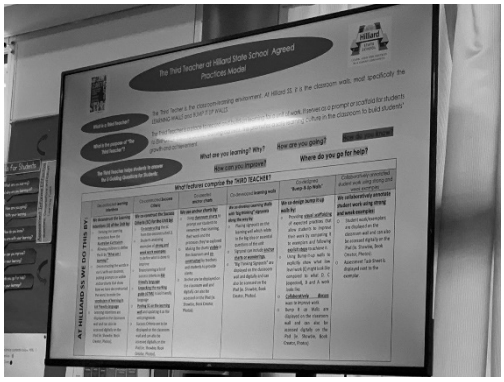
・What are you leaning?Why?　何を学んでいますか？なぜですか？
・How are you going?　調子はどうですか？
・How do you know?　どうやって分かるのですか？
・How can you improve?　どうすれば改善できますか？
・Where do you go for help?　どこに助けを求めますか？

たしかに、教室掲示には「What」「Why」等の言葉が並び、付箋等を使って学習の過程が示され、授業内ではディスカッションにも活用されており、作品をただ掲示するだけにとどまらない。児童もその役割を、肯定的に捉えているとのことである。

小学校における教室掲示の役割をここまで意識するのは、iPad 活用が日常的になる中で、教師の出が少ないからこそ、児童が自分で、あるいは協働して考える手がかりを視覚的に示す必要があるからだと思われる。また、オーストラリアには日本のような検定教科書はないので、児童が継続的に学びの手がかりにできるものが乏しいのだと考えた。iPad での個別最適化な学びが進めば進むほど、個と個とをつなぐ学習集団を育む教室の役割を果たすために、紙に描かれた掲示物が必要となるのは興味深かった。そして教師の役割は、直接教えることから、児童がよりよく学べるように、この空間をどれだけ居心地がよく、学ぶ手がかりにあふれたものにしていくかを熟慮し、よりよい伴走者となることへと変化しているのだと改めて感じた。



どこの教室にも Bump it Up Wall



Wall の目的や意義を教員間で共有

６　おわりに

帰る前に立ち寄った事務室の壁に、教職員全員の写真が飾られていた。なぜか全員ピンク色の服を着ているので副校長先生に尋ねると、毎年テーマカラーを決めて、その色の服を着て写真を撮るのだという。こんなことからも、先生方の仲のよさ、チームワークのよさが感じられる。いくつか視察させていただいた学校の中でも圧倒的に授業見学の時間が長く、その研修の組み方からも、「あれこれ説明するよりもまず、授業と児童の姿を見てほしい」と考えているであろう、先生方の思いが伝わってきた。校長先生は「児童自身が学ぶ姿勢をいかに見せながら学べるかが大切」とおっしゃっていたが、たしかに教室内だけではなく芝生や屋外のテーブルで、iPad を使って自律的に学ぶ児童の姿が印象的であった。

今回の視察で、Hilliard State School の先生方が先進的な取り組みを推し進めながらもその結果を検証し、教育目的の推進を目指して探究的に取り組んでこられたことに感銘を受けた。私の勤務校では、5 年前にやっと全教員が iPad を使い始めたばかりだったが、コロナ禍を経て、現在は 3～6 年生の児童が個人の iPad を所持し、どの教科でも活用されるようになった。国も教育環境も異なるため、全く同じような道筋とはいかないが、私も、勤務校のこれからの授業の在り方を、Bump it Up Walls のように、視覚的に示してみたいと思う。

Hilliard の先生方と一緒に記念撮影

参考：Hilliard State School HP　https://hilliardss.eq.edu.au/
令和元年度私立学校教員海外研修報告 p11～14